

円周率の数値計算

電気通信大学オープンキャンパス

緒方 秀教

電気通信大学 大学院情報理工学研究科 情報・ネットワーク工学専攻

2020年11月

はじめに

数学において、古代から現代まで多くの数学者が円周率 π の計算に挑戦してきた。

ここでは、その円周率計算の歴史を振り返り、同時に「数値計算」という学術分野の一端の紹介も兼ねたい。

円周率 π の計算法

- ① 正多角形の周長により評価する（古代，和算）。
- ② $\arctan x$ のグレゴリー級数による計算法。
- ③ 算術幾何平均。
- ④ ラマヌジャンの公式。

- 紀元前 2000 年頃のリンドパピルス.

$$\pi = \left(\frac{16}{9}\right)^2 = 3.1604\dots$$

- 旧約聖書： $\pi = 3$ を示す記述：

彼はまた海を鋳（い）で造った。縁から縁まで 10 キュツピットであって、周囲は円形をなし、高さは 5 キュツピットで、その周囲は網をもって測ると、30 キュツピットあった。

（歴代志下，4.2）

古代の円周率

古代における円周率 π の計算は、正多角形の周長により評価する方法が主流であった。

古代の円周率

古代における円周率 π の計算は、正多角形の周長により評価する方法が主流であった。

(余談) 2003 年, 東京大学入試問題

円周率が 3.05 より大きいことを証明せよ。

多くの受験参考書等に載っている解答は、円に内接する正 12 / 8 角形の周長により評価する方法である。

古代の円周率

古代における円周率 π の計算は、正多角形の周長により評価する方法が主流であった。

(余談) 2003 年, 東京大学入試問題

円周率が 3.05 より大きいことを証明せよ。

多くの受験参考書等に載っている解答は、円に内接する正 12 / 8 角形の周長により評価する方法である。

- アルキメデス (Archimedes) :
円に内接 / 外接する正 96 角形の周長より,

$$3.1410\dots = 3\frac{10}{71} < \pi < 3\frac{1}{7} = 3.1427\dots$$

和算：関孝和の円周率計算

関孝和 (1640?-1708) の円周率計算法

単位円に内接する正 2^n 角形の一辺の長さを a_n とすれば,

$$\pi = \lim_{n \rightarrow \infty} 2^{n-1} a_n.$$

a_n に対する漸化式を求める.

$$OD = \sqrt{1 - (a_n/2)^2},$$

$$AD = 1 - OD$$

$$= 1 - \sqrt{1 - (a_n/2)^2},$$

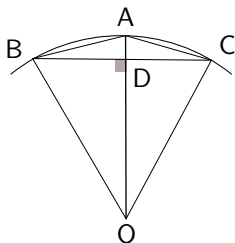
$$CD = a_n/2,$$

$$a_{n+1}^2 = AC^2 = AD^2 + CD^2$$

$$= (1 - \sqrt{1 - (a_n/2)^2})^2 + (a_n/2)^2$$

$$= 2 - \sqrt{4 - a_n^2},$$

$$\therefore a_{n+1} = \sqrt{2 - \sqrt{4 - a_n^2}}.$$



BC 正 2^n 角形の一辺
BA, AC 正 2^{n+1} 角形の辺
O 単位円の中心

和算：関孝和の円周率計算

円周率の近似数列 $\{\pi_n\}$ (関孝和)

$$a_2 = \sqrt{2}, \quad a_{n+1} = \sqrt{2 - \sqrt{4 - a_n^2}} \quad (n = 2, 3, \dots),$$
$$\pi_n = 2^{n-1} a_n \rightarrow \pi \quad (n \rightarrow \infty).$$

これを使ってパソコンで π の近似値を計算した。

n	π_n	相対誤差
10	3.14158 77252 77159 70062 88542 62702	2×10^{-6}
20	3.14159 26535 85093 23106 89057 95336	2×10^{-12}
30	3.14159 26535 89793 23398 03670 44950	1×10^{-18}
40	3.14159 26535 89793 23846 26391 08648	1×10^{-24}
π の厳密値	3.14159 26535 89793 23846 26433 83280 ...	

* 関孝和は $n = 17$ まで計算したそうである。

和算：関孝和の円周率計算とエイトケン加速

さらに、関孝和は次の事実に気づいた.

$$\pi_{15} = 3.14159\ 26487\ 76985\ 66948\ 51079\ 69277\ \dots,$$

$$\pi_{16} = 3.14159\ 26523\ 86591\ 34580\ 35255\ 21058\ \dots,$$

$$\pi_{17} = 3.14159\ 26532\ 88992\ 76527\ 19430\ 42174\ \dots,$$

$$\frac{\pi_{17} - \pi_{16}}{\pi_{16} - \pi_{15}} = 0.25000\ 00001\ 07716\ 23496\ 75673\ 20818\ \dots$$

$\pi_{n+1} - \pi_n$ は公比 ≈ 0.25 の等比数列に近づいていくようだ!

関はこの事実から、 π_{17} までの値を使ってさらに良い π の近似値を求めた. $r = (\pi_{17} - \pi_{16})/(\pi_{16} - \pi_{15})$ とおいて,

$$\begin{aligned}\pi &= \pi_{16} + (\pi_{17} - \pi_{16}) + (\pi_{18} - \pi_{17}) + \dots \\ &\simeq \pi_{16} + (\pi_{16} - \pi_{15})(r + r^2 + r^3 + \dots) \\ &= \pi_{16} + (\pi_{16} - \pi_{15})\frac{r}{1-r},\end{aligned}$$

和算：関孝和の円周率計算とエイトケン加速

$$\begin{aligned}\pi &\simeq \pi_{16} + (\pi_{16} - \pi_{15}) \frac{r}{1-r} \\ &= \pi_{16} + (\pi_{16} - \pi_{15}) \frac{\frac{\pi_{17} - \pi_{16}}{\pi_{16} - \pi_{15}}}{1 - \frac{\pi_{17} - \pi_{16}}{\pi_{16} - \pi_{15}}} \\ \pi &\simeq \pi_{16} - \frac{(\pi_{16} - \pi_{15})(\pi_{17} - \pi_{16})}{(\pi_{17} - \pi_{16}) - (\pi_{16} - \pi_{15})}.\end{aligned}$$

今の議論を一般化すると、 π_n よりもっと速く収束する π の近似数列 π'_n が得られる：

$$\pi'_n = \pi_{n+1} - \frac{(\pi_{n+1} - \pi_n)(\pi_{n+2} - \pi_{n+1})}{(\pi_{n+2} - \pi_{n+1}) - (\pi_{n+1} - \pi_n)},$$

和算：関孝和の円周率計算とエイトケン加速

改良された近似数列 π'_n で π の近似値を求めた。

n	π_n (改良前)	相対誤差
10	3.14158 77252 77159 70062 88542 62702	2×10^{-6}
20	3.14159 26535 85093 23106 89057 95336	2×10^{-12}
30	3.14159 26535 89793 23398 03670 44950	1×10^{-18}
38	3.14159 26535 89793 23846 25749 89170	2×10^{-23}
n	π'_n (改良後)	相対誤差
10	3.14159 26535 89938 19856 11615 72583	5×10^{-14}
20	3.14159 26535 89793 23846 26435 15120	4×10^{-26}
30	3.14159 26535 89793 23846 26433 83280	4×10^{-38}
38	3.14159 26535 89793 23846 26433 83280	9×10^{-48}
厳密値	3.14159 26535 89793 23846 26433 83280...	

確かに、改良された数列 π'_n は π_n より速く収束している。

エイトケン (Aitken) 加速

数列 $\{a_n\}$ の極限 $a = \lim_{n \rightarrow \infty} a_n$ を求めたいとき、 $\{a_n\}$ よりもっと速く a に収束する数列 $\{a'_n\}$ を下記で求め、極限 a を効率よく求める方法。

$$a'_n = a_n - \frac{(a_{n+1} - a_n)^2}{a_{n+2} - 2a_{n+1} + a_n}.$$

- 日本では関孝和が 1680 年に発見した
(当時は「増約術」と呼んだ)。
- 欧州では 1926 年にエイトケンが最初にエイトケン加速法を用いた。
1876 年に H. von Nägelsbach が最初に用いたという話も。
- 関がエイトケン加速を発見した事実は、Brezinski が再発見した。

和算で最初の円周率公式

建部賢弘 (1772)

$$\pi^2 = 9 \left(1 + \frac{1^2}{3 \cdot 4} + \frac{1^2 \cdot 2^2}{3 \cdot 4 \cdot 5 \cdot 6} + \frac{1^2 \cdot 2^2 \cdot 3^2}{3 \cdot 4 \cdot 5 \cdot 6 \cdot 7 \cdot 8} + \dots \right).$$

π_n : 右辺を第 0 ~ n 項で打ち切って計算された π の近似値.

n	π_n	相対誤差
4	3.14148 50901 17183 96036 66075	3×10^{-5}
8	3.14159 24555 12120 93228 34703	6×10^{-8}
12	3.14159 26531 19234 49522 63975	1×10^{-10}
16	3.14159 26535 88526 71739 89080	4×10^{-13}
20	3.14159 26535 89789 56596 43702	1×10^{-15}
40	3.14159 26535 89793 23846 26434	4×10^{-28}
100	3.14159 26535 89793 23846 26434	8×10^{-65}
188	3.14159 26535 89793 23846 26434	7×10^{-116}

arctan x のグレゴリー級数による方法

17世紀の微積分の発見により、様々な関数の無限級数展開が得られた。

arctan x : tan の逆関数. $y = \arctan x \Leftrightarrow x = \tan y$.

arctan x に対するグレゴリー (Gregory) 級数

$$\arctan x = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(-1)^n}{2n+1} x^{2n+1} = x - \frac{x^3}{3} + \frac{x^5}{5} - \frac{x^7}{7} + \dots$$

$x = 1$ を代入すると ($\tan(\pi/4) = 1$ より $\arctan 1 = \pi/4$ であるから),

$$\frac{\pi}{4} = 1 - \frac{1}{3} + \frac{1}{5} - \frac{1}{7} + \dots$$

ただし、この級数は収束が遅く、円周率計算には使えない。
(式自体は美しく神秘的であるが…)

arctan x のグレゴリー級数による方法

マチン (Machine) の公式

$$\frac{\pi}{4} = 4 \arctan \frac{1}{5} - \arctan \frac{1}{239}.$$

Machine はこの等式において, Gregory 級数を有限桁で打ち切って arctan を計算することにより, π を 100 桁計算した.

グレゴリー級数を第 0 ~ n 項で打ち切って arctan を計算することにより得られる π の近似値を π_n とする.

n	π_n	相対誤差
2	3.14162 10293 25034 42504 68325	9×10^{-6}
4	3.14159 26824 04399 51724 02598	9×10^{-9}
6	3.14159 26536 23554 76199 55046	6×10^{-11}
8	3.14159 26535 89835 84748 57007	1×10^{-14}
10	3.14159 26535 89793 29474 73749	2×10^{-17}
12	3.14159 26535 89793 23853 93246	2×10^{-20}
70	3.14159 26535 89793 23846 26434	4×10^{-102}

$\arctan x$ のグレゴリー級数による方法

同種の方法.

- クリゲンシュテルナ (Klingenstierna, 1730)

$$\frac{\pi}{4} = 8 \arctan \frac{1}{10} - \arctan \frac{1}{239} - 4 \arctan \frac{1}{515}.$$

- ガウス (Gauss, 1863)

$$\frac{\pi}{4} = 12 \arctan \frac{1}{18} + 8 \arctan \frac{1}{57} - 5 \arctan \frac{1}{239}.$$

- シュテルメル (Störmer, 1896)

$$\frac{\pi}{4} = 6 \arctan \frac{1}{8} + 2 \arctan \frac{1}{57} + \arctan \frac{1}{239}.$$

- 高野喜久雄 (1982)

$$\frac{\pi}{4} = 12 \arctan \frac{1}{49} + 32 \arctan \frac{1}{57} - 5 \arctan \frac{1}{239} + 12 \arctan \frac{1}{110443}.$$

$\arctan x$ のグレゴリー級数による方法

グレゴリー級数による方法

- 有理数の四則演算だけでできる.
- コンピュータが出現する以前の π の数値計算法.

高野の方法で π の近似値を計算した. π_n の定義は前と同様.

n	π_n	相対誤差
2	3.14159 26536 09251 91213 79438	6×10^{-12}
4	3.14159 26535 89793 24014 20633	5×10^{-19}
6	3.14159 26535 89793 23846 26436	6×10^{-26}
8	3.14159 26535 89793 23846 26434	7×10^{-33}
	...	
30	3.14159 26535 89793 23846 26434	8×10^{-108}

意外と速く収束する.

算術幾何平均による方法

$a, b > 0$ の算術平均（相加平均），幾何平均（相乗平均）。

$$\text{算術平均： } \frac{1}{2}(a + b), \quad \text{幾何平均： } \sqrt{ab}.$$

算術平均・幾何平均をとる操作を繰り返して
数列 $\{a_n\}, \{b_n\}$ を生成する：

$$a_0 = a, \quad b_0 = b,$$
$$a_{n+1} = \frac{1}{2}(a_n + b_n), \quad b_{n+1} = \sqrt{a_n b_n} \quad (n = 0, 1, 2, \dots).$$

$$b_0 \leq b_1 \leq b_2 \leq \dots \leq b_n \leq \dots \leq a_n \leq \dots \leq a_2 \leq a_1 \leq a_0,$$

$$a_n - b_n \leq \frac{1}{2^n}(a_0 - b_0) \rightarrow 0 \quad (n \rightarrow \infty).$$

$\therefore n \rightarrow \infty$ で a_n, b_n は同じ値に収束する…算術幾何平均

$$a, b \text{ の算術幾何平均 } M(a, b) = \lim_{n \rightarrow \infty} a_n = \lim_{n \rightarrow \infty} b_n.$$

算術幾何平均による方法

$a_n, b_n \rightarrow M(a, b)$ の収束は極めて速い.

(例) $a = a_0 = 1, b = b_0 = 1/\sqrt{2}$ の場合 :

n	a_n					b_n				
0	1.00000	00000	00000	00000	00000	0.70710	67811	86547	52440	08443
1	0.85355	33905	93273	76220	04221	0.84089	64152	53714	54303	11254
2	0.84722	49029	23494	15261	57738	0.84720	12667	46891	46040	36315
3	0.84721	30848	35192	80650	97026	0.84721	30847	52765	36670	42981
4	0.84721	30847	93979	08660	70003	0.84721	30847	93979	08660	59979
5	0.84721	30847	93979	08660	64991	0.84721	30847	93979	08660	64991

算術幾何平均による方法

楕円積分の理論より、算術幾何平均による円周率の計算法が得られる。

$$a_0 = 1, \quad b_0 = 1/\sqrt{2},$$
$$a_{n+1} = \frac{1}{2}(a_n + b_n), \quad b_{n+1} = \sqrt{a_n b_n}, \quad c_n = \sqrt{a_n^2 - b_n^2} \quad (n = 0, 1, 2, \dots)$$

算術幾何平均による円周率の表式

$$\pi = \frac{2M(1, 1/\sqrt{2})^2}{1 - \sum_{n=0}^{\infty} 2^n c_n^2}.$$

算術幾何平均による円周率の近似式

$$\pi \simeq \pi_N = \frac{2a_{N+1}^2}{1 - \sum_{n=0}^N 2^n c_n^2}.$$

算術幾何平均による方法

$\pi_N \rightarrow \pi$ は極めて収束が速い.

N	π_N	相対誤差
0	2.91421 35623 73095 04880 16887 24209 69807 85696 71875	7×10^{-2}
1	3.14057 92505 22168 24831 13312 68975 82331 17734 40237	3×10^{-4}
2	3.14159 26462 13542 28214 93444 31982 69577 43144 37223	2×10^{-9}
3	3.14159 26535 89793 23827 95127 74801 86397 43812 25504	6×10^{-20}
4	3.14159 26535 89793 23846 26433 83279 50288 41971 14678	2×10^{-41}
5	3.14159 26535 89793 23846 26433 83279 50288 41971 69399	8×10^{-85}
6	3.14159 26535 89793 23846 26433 83279 50288 41971 69399	7×10^{-172}
	...	
9	3.14159 26535 89793 23846 26433 83279 50288 41971 69399	8×10^{-1001}

* $\pi \simeq \pi_N$ の誤差評価 :

$$\pi - \pi_N \leq \frac{\pi^2 2^{N+4} e^{-\pi^2 N+1}}{M(1, 1/\sqrt{2})^2}, \quad \pi - \pi_{N+1} \leq \frac{2^{-(N+1)}}{\pi^2} (\pi - \pi_N)^2.$$

各段で $\pi_N \simeq \pi$ の有効桁数が倍になっている.

ラマヌジャン (Srinivasa Aiyangar Ramanujan)

- 1887~1920. インド出身.
- 港湾事務所の事務員の仕事をしながら, 独学で数学の研究に勤しむ.
- 英国数学者ハーディ(Hardy) にその才能を見いだされて渡英, 共同研究.
- 常人ではとても思いつかない摩訶不思議な多くの公式.
ラマヌジャンいわく, ナーマギリ女神が夢の中で教えてくれたと...

ラマヌジャン (郵便切手にもなっている)



画像は, MacTutor History of Mathematics
(<https://mathshistory.st-andrews.ac.uk/>) より転載.

ラマヌジャン (Ramanujan)

円周率の公式 (ラマヌジャン, 1914)

$$\frac{1}{\pi} = \frac{\sqrt{8}}{99^2} \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(4n)!}{(4^n n!)^4} \frac{1103 + 26390n}{99^{4n}}.$$

$$\frac{4}{\pi} = \frac{1}{882} \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(-1)^n (4n)!}{(4^n n!)^4} \frac{1123 + 21460n}{882^{2n}}.$$

こんな公式, どうすれば思いつくのやら…?

ラマヌジャン (Ramanujan)

1 番目の公式で π を計算してみた.

第 $0 \sim n$ 項の部分和から求めた π の近似値を π_n とする.

n	π_n	誤差
1	3.14159 26535 89793 87799 89058 26306	2×10^{-16}
5	3.14159 26535 89793 23846 26433 83280	2×10^{-48}
10	...	1×10^{-88}
50	驚異的な収束の速さ!	3×10^{-408}
π の厳密値	3.14159 26535 89793 23846 26433 83280 ...	

Chudnovsky の公式 : ラマヌジャンタイプの公式

Chudnovsky の公式 (1987)

$$\frac{1}{\pi} = \frac{12}{640320^{3/2}} \sum_{n=0}^{\infty} \frac{(-1)^n (6n)! (13591409 + 545140134n)}{(3n)! (n!)^3 640320^{3n}}.$$

π_n : 第 0 ~ n 項の部分和から得られる π の近似値.

n	π_n	相対誤差
1	3.14159 26535 89793 23846 26433 83587 35068 84758 66345	1×10^{-28}
2	3.14159 26535 89793 23846 26433 83279 50288 41971 67678	6×10^{-43}
3	3.14159 26535 89793 23846 26433 83279 50288 41971 69399	3×10^{-57}
10		1×10^{-156}
20	ラマヌジャンの公式よりもっと驚異的な速さで収束する!	1×10^{-298}
50		3×10^{-724}
70		7×10^{-1002}

円周率計算の記録

年	計算者	桁数	要した時間
	Archimedes	3	
	van Ceulen	34	一生
1706	Machin	100	
1844	Dase	205	8 時間
1947	Ferguson	808	
	(電子計算機時代)		
1949	Reitwiesner	2,037	70 時間
1958	Genuys	10,000	100 分
1961	Shanks, Wrench	100,000	9 時間
1973	Gouilloud, Bouyer	1,000,000	24 時間
1982	金田, 吉野, 田村	16,000,000	30 時間
	...		
2010	Yee, 近藤	5,000,000,000,000	90 日
2019	Yee, 岩尾	31,415,926,535,897	118 日
2020	Yee, Mullican	50,000,000,000,000	303 日

- みなさんも今回紹介した計算公式を使って、実際に円周率計算をやってみてほしい。
数値計算：実際に自分の手を動かしてやってみると楽しい。
数値計算は実験科学。
- 円周率計算の歴史は、数学・計算機科学の発展とともにある。
∴ 円周率計算は重要な学術分野である。
- 多倍長計算：**exflib** がお勧めのライブラリ。
 - H. Fujiwara: Exflib information,
<http://www-an.acs.i.kyoto-u.ac.jp/~fujiwara/exflib/>
 - exflib を含めた多倍長計算に関する解説。
桂田祐史：多倍長計算ノート,
<http://nalab.mind.meiji.ac.jp/~mk/lab0/text/on-multiprecision.pdf>

- 梅村浩：楕円関数論-楕円曲線の解析学，東京大学出版会，2000年。
- 円周率.jp：<http://円周率.jp/formula/ramanujan.html>
- 建部賢弘の「綴術算経」(Imujii's Page)：
<https://sites.google.com/site/seijiimura/home/16-he-suanno-yan-jiu/03-jian-bu-xian-hongno-zhui-shu-suan-jing>
- コラム 円周率（江戸の数学）：
<https://www.ndl.go.jp/math/s1/c4.html>
- Chudnovsky の円周率計算公式の解説（大学2~3年で習う複素関数論の知識があれば読める）。
L. Milla: A detailed proof of the Chudnovsky formula with means of basic complex analysis, arXiv:1809.00533, 2020.